

61
4)[illegible]

官の感は人の所謂質を縁して起る。質は人の
所謂實なり。實は人の所謂物なり。
喟つば眼の花を觀て、此花紅なりと感ずるが如
し。花は人の所謂質なり。實なり。物なり。其
花無くして眼の紅を感ずること無し。故に官
の感は人の所謂質を縁して起るとなり。
耳、鼻、舌、身の感の起るも、亦眼の感の起
るが如し。必ずず人の所謂質を縁して起る。

別行

官の感の質を縁せずして起るとき、人これを
病感とす。人の所謂實を縁せず、人の所謂
物を縁せずが故なり。
喟つば熱病を患ふ者の、室中人無くして人を觀
るが如し。病者は在りてはふしく人を觀る、
而も人の室中は在ること有る無し。又喟つば
凡病を患る者の、窓外は水無くして、而も水
聲を聴くが如し。病者は在りてはふしく水を
聴く、而も水の窓外は流るること有る無し。
是の如きも病感とす。病感は官の感にあらず。



本間文庫
文庫 14
A150



幸田露伴原稿断簡

幸田露伴筋原稿断片

わが著續明治文學史中巻所収

本所入付蔵

